



あなたの
事が大好きですずっとずっと
思い続けてる

せいで母乳が

止まりませんの！

「まったく！あなたと言う人はいい加減にしてくださいまし！」
放課後の帰路、俺は言う事を聞かない犬の散歩のように女子に無理やりに引っ張られながら、歩かされている。



彼女の名前は、『綿貫 転音』
近所で同じ年で家族ぐるみで昔から絡みがある幼なじみ。
「ロネ」と言う犬のような名前に負けないほど小型犬のように小さく
愛らしくキャンキャンといつも俺の周りで吠えている女の子だ。

いきなり悪態をついてみたが、
「ロネはしっかり者で、俺が人並みに勉強が
出来るのも彼女が教えてくれるからで、
忘れた宿題、遅刻、教師から呼び出し…
何度助けられたかわからないのだから、
彼女のこういう叱咤も
少しだけ感謝している。

あなたこそ
人は…。

ムム…。

だが！今回は、怒られている心当たりがないのだ。
一緒に進路に進むためと無理やり勉強させてくる「ロネの
理想を満たす程度には模試の結果もよかった…。
他の女子と仲良くしていたわけでもない…。

「あなたは…こんな怒っているのに
おっぱいをムムムム続けるなんて…
なんて人ですか？」
「それはお前が押し付けてるんじゃないか！」

ん♡

ムム

ムム

「とにかく！わたくしの家に参りますわ！
幸いお父様も出張ですの…
ゆっくりと話させていただきますの…！」





「あなたのせいなんですの…だから約束してくださいまし…
見ても嫌いにならない…世界一大好きなままです…」
俺がいつお前を世界一好きになったんだ？と言いかけたが、俺は冷静になった。
なぜなら今にも कोरोネがおっぱいを見せようとしていたからだ…確かに俺は कोरोネを恋愛対象で見たことはない。
だが俺は日々押し付けられる कोरोネのおっぱいの
感触を毎日のようにオカズにしているのだ。
その自慰回数はずを越えていた…。



見たい!!

子どもの頃はピンク色の乳首をよく見ていたが、
発育後のものは見ていない…見たいという俺の思春期の性がとつもなくイケボで言葉を発していた。

「大丈夫… कोरोネの（おっぱいの）事を世界一大好きなままです…」

ブフオアツッ!

柔らかすぎて形が崩れておらず、色白で乳首はピンク色…俺の思春期が溢れ出しそうになる…それを抑えてクールに振舞う…。そしてガン見しつつ脳裏に焼き付ける…。

「おっぱいからミルクが
出ちゃいますの…。」

「そうか…大丈夫だ…。
嫌いになんかならないよ。」

乳首が真っ黒とかそういう相談くらいに思ってた俺は完全に裏切られたというか…。身体の事で泣くほど悩んでいる世話焼きな幼なじみに自然と優しく声をかけていた。だが俺の身体は違った…俺の妄想をはるかに超えて「コロナのおっぱいは美しく母乳で怪しげな艶を放っていたから…。」



ブジュツ！と音がした

最初何かわからなかった。赤いのが見えて。それから真っ白になった。
俺の脳はヨロネを幼なじみとして癒さなきゃと自我を保ち、逆に体は完全に欲情していた。
脳が身体を抑えて優しく振舞おうとしたが、抑えきれない興奮が鼻血になって噴き出したのだ。



「ヨロネ……おま……」

「こんな可愛かったっけ……？」

「ヨロネが俺の名前を呼ぶ中で、とんでもなく間が抜けたことを言いながら、
倒れゆく俺は、無意味に死を覚悟し走馬灯を見るのだった……」

「ほんとにあなたは仕方がない人ですの…。」

消え入りそうな不安げなコロネの声がする。
柔らかい肉感の指が俺の指に絡んで優しく刺激していた。

「わりい…マジなさけねえ…」

コロネが素直で大人しい時は、俺も素直に
応えることにしている。

「なさけなくは

ありませんの…。」

コロネ自身は、俺を仕方ないとか色々言うが、
俺自身や他人が俺を悪く言うとかすぐ否定する。

「コロネ…とりあえず胸を隠そうか？」

「あなたを心配すると溢れてきちゃいますの…」

服が汚れちゃうのですの。」「…それで俺のせいってわけか…。なんでそうなった？」「



「もう！無自覚なんですから！いい加減にしてくださいまし！」

逆に幼なじみの母乳を出す方法があるなら知りたい。。

「わたくしいつもあなたのこと考えていますの…
だらしないあなた…わたくしたちの将来が心配ですの！
大人になれば私たちの子供ができますの！」

「…待て！なぜ子供ができるんだ！」

冷静であろうとした

俺もスルー出来ず

ツツコミを入れた。

「もう！あなたって人は！愛しあう二人が側に居れば、
自然とできるものですの！ちゃんと勉強してくださいまし！」

けしてコロナは悪い子ではないのだ…友達も多いし家族思いで世話焼きだ…
だが俺に対してのみ、異常に思い込みが激しいのだ！

「それで赤ちゃんが出来た時、育児の事を一杯考えてシミュレートしておりましたの！
そしたらミルクが出るようになって、特に！あなたの事を考えると溢れ出しますの！」



「俺が悪かった…心を入れ替えて頑張ル…ダカラ母乳止メロ。」
俺はとりあえず途中から全く感情がこもらないほどに、
心にもない事を言った。それと同時に母乳が噴出した。
「お分かりの通りです…あなたのいい加減な言動が
わたくしのミルクを生み出していますの。」
「とにかくコロナの将来の方が心配だ。
止める方法を考えよう。」

うっ…



ビュ!!

なんとなく原因は理解した…。思い込みが激しいコロナが
赤ちゃんがいる自分をシミュレートし思い込み続けた。
それにより身体は自分が母親であると誤解して母乳を生んでいるのだ。
「とにかくコロナ！頭の中で満足しろ。母乳が出る不安を満足させる
シミュレート結果を得るんだ！それで止まるから！」

「やっぱりわたくしの惚れこんだ人ですの
わたくしが一週間考えた結論を
すぐ出しましたの。」

コロネの顔が近い…思い切り強く
コロネの手が俺の顔を
固定している。



「おい？コロネ？」
「もう！早く
目を閉じて
下さいまし！」

コロネは俺に
覆いかぶさった…

「大好きですの…。」

そう言った「ロネの唇が俺の唇にふわりと触れた。柔らかい感触と少し暖かい温度を時間をかけて俺の唇に伝えていた…。」

…長い…

胸キュンは一瞬…

そのあと

一分くらい

ずっと

触れるだけが

続いている…

「もう…仕方ない人ですの…あにやたわ…。」

どうも俺のターン

だったようだ…

そう思った瞬間

俺の性が暴発する。



ん♡あふ♡はげし♡

俺はコロナの薄く開かれた唇に吸い付いて
無理やり開かせて中に舌を押し込んだ…
「あ…ふあ…もつと…優しく…♡
仕方ない…人…♡」
コロナが何も話せないように
口の中に溜め込んだ
唾液をコロナの口に
押し入れた。

「コロナが悪い…。」

2人ともが
初めてのキスで
乱雑な行為だった…。
でも言葉とは逆に
可愛らしい幼なじみの
唇を離したくなかった。

「大好きですの♡
あなたはなかなか好きと言ってくれませんが
わたくしはあなたが大好きですの♡」
カップラーメンができるほどの時間、
唇を合わせてゴロネは
身体を離れた…。
「これで？
母乳は
止まるのか？」
根本的な
質問をした。



「もう！仕方ない人！
止まるわけないじゃ
ありませんか？
これはアレの前に
済ませるのが順序じゃ
ありませんこと？」
早く帰って寝たい
そう思った。

「さあ…婚姻の契りも済みましたの♡
あなたしっかりとミルクを吸ってくださいませね♡」
「ツツコミどころが満載なのだが、説明を頼みたい。」
「…もう仕方ない人ですの♡シミュレートのは了了は
授乳の実践訓練に決まっていますの♡
…そこはわかっていますの？婚姻について？
婚姻前におっぱいに口づけするなんて順序が間違っていますの
だから先に婚姻しましたのよ♡あなた♡」



とりあえず、今は母乳を止めることに全力を注ぎよう…。
思考を停止させて、コロネが押し付けてくる胸に顔を近づけた。

「んんっ♡」

舌先が「ロネ」の乳首に触れると「ロネ」の息遣いが聞こえて「ロネ」は少しおっぱいを手で絞るように母乳を舌先に出した…。生ぬるくて少し甘みを感じる程度で無味なものだった。だが長い付き合いだからわかるが「ロネ」が怒っている！「ちゃんと愛しているって言うってから吸ってくださいます」。『オレ赤ちゃん担当シヤペラナイ。』

「言ったださいます」



「「ロネ」いつもありがとう…何て言うか普通に感謝してる…お前に会えてよかった。」

愛してるは言わないで適当な事を言っつもりが割と本音が出た。

んんっ♡

「きゃん♥あ…そんな強く吸っちゃ苦し…あ♥」
俺は後で赤くなるなど言うくらいには強く乳首に吸い付いた。
音を立てて吸うたびに「ゴロネは喘ぎ声を漏らす…」
甘えた声を出す「ゴロネは、意外にも感謝の言葉が効いたらしく
甘えたモードに入っている。」
俺はと言うと完全にケダモノだった。
思えばずっとオナベツトにしてきた幼なじみの乳首を吸って
幼なじみは喘ぎ声をあげているのだから仕方ない。

もっ♡

んんな
しゅやうめ♡

なによりこんなもの赤ちゃんが吸えるのか〜と聞いてびっくり、
かなり強く吸わないと出てこないのだ。
そういう免罪符が俺の性欲により乱暴に吸う許可を出していた。

グニル…



「もう…仕方ない人ですの…あなたとは…
まるで本当の赤ちゃんみたいですの♡」
ジルジルと音を立てて母乳を吸う俺に कोरोनाはそう言うが
赤ちゃん役をしているのだから褒められるべきなのだ。
でも कोरोनाは俺をすぐ仕方ない人にしたがるのだ。
 कोरोनाのような母性が強い女の子にとって、
 だらしない俺でないと付けなくて、俺もそれに依存して
 この子にずっと甘えてきたのだ。

もう♡

大好き
びすの♡

俺はゆっくりと時間をかけて、 कोरोनाの左右の母乳を
 吸いだしたのだが、既に別の問題が発生している。



俺はコロネを押し倒してまたがっていた。
コロネの母乳は全部出したが、
俺の欲望が限界を越えて溜まってる。
「どうしたんですの…？」
「少し怖いんですの…。」

「コロネにいつもの勢いが無い…
割とガチで怖がってる…なのに
俺のミルクも溜まってるんだよ！
「コロネが悪いんだからな！」

俺は我慢しすぎてやや先走った汁に濡れた男性器を「ロネ」に突き付けた。「俺は「ロネ」に恋愛感情なんてねえけど！俺の側にずっとお前しかいないし！お前だけだから！お前でしか！オオ」した」とねえんだよ！」



「そのお前のおっぱい触って！我慢できるわけねえだろ！今度は「ロネ」が責任とれよ！」
無茶苦茶な理由を叫んでいた！

母乳で濡れたコロネの胸の狭間は
簡単に俺の性器を飲み込んで、
先をコロネの眼前に突き出した。
コロネはただ黙ってその行為を見ている。
興奮状態の俺の腕はコロネの胸を
さらに歪めて狭間を狭くする。



我慢しすぎて敏感になっている
俺の性器に対して、
その狭く濡れた道筋は
気持ち良すぎたんだ。

気持ちよさに耐え切れずに溜まりに溜まった欲望を、
コロボの顔に向けて発射し続けた。
性器は何度も痙攣しその度に
自分でも信じられない量の精液が
飛び出していった。



そして冷静になっていく…
大事な幼なじみに
無理やりにした現状を前に、
最低の気持ちに沈んでいく…。

もっ!!

ぬっ!!

「あなたって人は！最低ですよ！」
「お前でしかオナニーしたことない」なんて
最低の『愛してる』ですよ！」
「ロネは怒って母乳をまき散らして
そっ言った……」
「愛してる……？俺が……？ロネを……？」



「でもそんな愛してるでも
女の子には嬉しいですよ…♥
これからは言葉に気を付けて
言ってくださいまし♥」

ずっとコロネが思い込みが激しいと思っていた…でも違った…俺がコロネに恋愛感情がないと思いついてきたんだ。
コロネと毎日登下校して休みも一緒に勉強して、「コロネの事思いながら千回オナニーして、愛してないわけじゃないか…」



まだまだ
ですの♡

「それではあなた♡
婚姻初夜はまだ始まったところですよ♡
続きをしますの♡
夫婦としての既成事実を作りますの♡」

ヤルのかよ……？……前言撤回……
マジで帰りてえ……俺の中の賢者が帰れと言ったが……ビーストテイマーはすぐ制御を失った……。



「さあ♥あなた…
わたくしのかいこに
差し入れて射精して
くださいまし♥
受精着床懐妊と
致すのが初夜で
ございませし♥」

こんなシミュレートを
していたらすぐ母乳も
出るわけだ…

コロリと転がってお尻を
突き出すコロネは、
わかってるのかいれないのか
お尻を振って小悪魔な笑顔を
こちらに向けている。

「後ろからの方が、
奥まで刺さりますの♥
逆さに向いた方がこぼれずに精液が
わたくしの中に留まりますの♥
ちゃんと調べたのですの♥」

どこからか仕入れてきた知識も
表情も刺さりすぎるほど俺の性癖に突き刺さる。

「クソかわいいな…なんか腹立つくらい！
好きだから！ちゃんと避妊するからな！」

コンドームも何もないから、
とりあえずイク時、引き抜いて、
あのドヤ顔にもう一回ぶっかけてやろうと俺は思った。



ドキ
ドキ
の♡

「もう！あなたはなんて人ですの！」

そこはキスすると「ころじゃありませんの！」

「ひっ♡やめてくださいまし♡」

もちろん濡らしてやらないと

処女開通は痛いわけで

まず前戯から始めた。

身をよじって嫌がってみせる「コロネだったが…」

「身体は正直だなあ？」

「ピクピク跳ねてもっとももっとって求めてるぜ？」

「くすぐりたいですの…あ…ふあ…♡」

あなたわ…ほんとに…あ…らめって「うい」と…」

すきなんですからあ…♡」

さっき射精したばかりで少し時間が必要だったので、
たっぷり時間をかけて乳首やクリトリスを散々責め倒し、
可愛い「コロネ」の身体を愛液と母乳でたっぷり濡らしてやった…。

ピク
ピク

70%
70%

ころ
ころ

やめ
♡

「早く♡早く♡ですの♡」

フクフク♡

「ロネは女の子の初エッチがとつもなく痛い事を知らないで、期待に胸を躍らせて俺を見上げている。後背位での性行為を求めているロネは「可愛い顔が見たいから」と言う素直に仰向けになってくれた。たっぷり濡らして頭をなでたりキスしたりと気持ちも体も準備を、

整えた。結果が激痛であっても俺の責任はない。そっ思いい行為に入ることにした。



「あの…あなた？本当にそれはそこに入りますの？」



俺は男性器の先を「ロネ」の入り口に押し当てて少し力を加えてみる。
「ロネは」んなどでも世間知らずのお嬢様なのだ。
苦しい事や辛い」とをあまり知らずに育ってきたのだ。
わずかな圧迫感にすでに不安そうな表情を浮かべている。
俺は「ロネ」の困ってる表情に非常に大きな興奮を覚えて、
さらに腰に体重を乗せて男性器を前に進めるのだった。

「らめえ♡痛あ♡らめですの♡
なんてひどいですの♡
らめですのお♡」



肉を裂くように亀頭を膣に挿入したが痛がるコロネを見て俺は止まった。
「コロネの事を考えると、俺は本当にこの子が好きなの」とに気付く、
そのコロネが嫌がっている表情を見て俺は行為を中断しようと思ひ、
愛しいコロネの可愛い顔や胸を冷静に眺めてみた。
ダメだ…好きすぎてやっぱセックスしてえ…そう結論付けて、
さっきよりさらに体重をかけて身体ごと
性器を奥へ奥へと突き動かした。

×
×

「あなたって人は…もっと…優しく…お願い…♡」
かなり苦しそうだがそこまで激しい出血もなく、
しっかりと奥まで開通した…。
一息つき膣が受け入れるように馴染むのを確認し、
腰を動かす…。

めん♡♡♡

「ゆっくり♡ゆっくり♡」

ヨロネの注文は多いが、無視して
自分の欲望優先で激しく動く。
苦しくて手で俺の動きを邪魔しそうに
なるのを、自分で抑えながらセックスを
受け入れているヨロネが可愛い。

ズキ!

ズキ



「あなたたつてば、
言いつ事を聞かない子犬ちゃんみたいですの♡」
耳元で「好きすぎて止まらない」と素直に伝えると
簡単にデレる子犬みたいなチヨロいコロネ

もっ♡仕方ない♡

「す」し余裕が出てきましたの♡

あなた♡少しじじとしててくださいまし

わたくしも動いてみますの♡」

凄く嫌な予感がしたが、

拒む前に「コロネの腕が伸びてしっかりと

俺を抱きしめていた...

アッ!

アッ!

「あ…あなたと繋がってますの…♡
あなたの温度も鼓動も全部わかつちやいますの♡」
コロネは俺の首に手を、腰には足をまわして固定して
いわゆる『だいしゆきホールド』というやつで、俺に張り付いて
離さないようにしながら全身を上下運動させるようにして
性的な快感に浸っていく…。

コロネは本当にハグが好きな女の子で、ボディタッチも得意で
普段から毎日俺にくっついてるのだ…つまり…
なんと…か男の触り方を心得ているというか簡単に言うとな…
「コロネ…ヤバいくらい気持ちいい…ちよつとゆっくりと頼む…。」



「好きですの♡好きにストップなんてありませんの♡」

「こうやって『コロナのこと考えるとよくわかる…』

俺たち似た者同士なんだと…」

相思相愛で思い込みが激しくて主導権を取ると

相手のこと考えずに好き勝手にしちゃう…」



「このままイクと中に出てしまう…」

「コロナは離してくれないし、疲れるまで耐えるしかない…」

「脳内を賢者にして他の事を考え…ムリだ…」

「コロナの膣がどんどん濡れてねっとり絡みついては
吸い付いて俺の性器をぐっちよりと…うっ…」

じゅぽ

じゅぽ

素直に
射精する。

せつかくなので
思い切り射精する
ためにコロネを
押し倒して

抱きしめた。
その瞬間に
膣の奥が開き、
コロネが

絶頂に達した…。
「らめえ♡
イキますの♡
イっちゃいますの♡」

ビュル…膣の脈動に
逆らうように俺の性器が
脈打って精液を奥へと
注ぎ込んだ。

脈打つたびに奥へ奥へと
身体を寄せて性器を
押し込んで何度も
射精していく。

その回数だけコロネは
絶頂に達するように
痙攣する。

「愛してる…コロネ」

時間をかけて全部出し終えて、
コロネにキスをした…。



イグ♡

イぢゃう♡

ビュル!

ビュル!

ビュル!

ビュル!

「あなた様♥

わたくし結ばれて

幸せですの♥」

コロナの乳首から
溢れ出す母乳を
見て、

本来の目的は

果たせなかったと

知ったが、

「ちゃんと毎日

吸ってやるから…」

と伝えると

コロナは幸せそうに

はにかんだ。

「ところであなた様♥

殿方の役割に避妊と

言うものが

あるらしいのですの♥

大丈夫ですの?」

やはりか…と思い

膣からあふれてくる精液を

数秒眺めてからコロナの瞳を見て

全力のイケメンボイスで

こう言った。

「大丈夫だ…

問題ない!」



…可

「もう！あなた様って人ば！だからちゃんと避妊したかを確認しましたのに！」

あれから二ヶ月、俺とヨロネは正式に交際し、ほんとにケダモノのようにセックスした。俺ももちろんヨロネもセックスが好きで、毎日の母乳の処理のついでに繰り返していたわけだが、二回目からはちゃんと「ソドム」も用意したし、ヨロネはゴムの感触がイヤとゴネていたが、説得し、しっかりと着用していたのだが…

どうも出来てしまったらしい…



「あなた様！真面目に聞いておられますの？」

割と茫然自失で立ち尽くす俺に、いつもの調子でヨロネは責め立てる。

「愛しいヨロネ様？大変見苦しいのですが…言い訳をお許しください…」

「はい…愛しいあなた様…言い訳を許します…」

そう…俺は納得いかなかったのだ…

「俺たちの初エッチっていつだったっけ？」

「怒りますわよ？ちよつと」が月前ですのー」

そつ「ロネのお腹は臨月のそれ…もつ生まれそつなほどの大きさだったのだ…。
時期が合わない。はつきりそつ伝えてみる。」

「あなた様は、わたくしが運命のあなた様以外と不貞行為をしたとでも？」

「ロネに関してそ」はありえないし絶対の信頼を置いている。

つまりだ…母乳の時と同じよ…



「想像妊娠？思い込みで身体が勝手に膨れてきていると？」

確か「…毎日赤ちゃんが出来るシミュレートを想像しておりますの…」

お前はもつシミュレートをするな…。そつまで言いかけてやほり優しく諭す「や」した。

「出産を疑似体験することで満足したら元に戻るのですの…？」

「んなにお腹で「ロロ赤ちゃん」が動きますの「や」」

とつう流れで出産プレイをする「と」になった。

「納得いきませんの…お腹にあなた様の
子供が居ることくらい
わかりますの…」



拗ねるコロネを無理やりソファに座らせた。

「どうしておっぱいまで出さねばなりませんの？」

あれから俺の何が変わったかと言っと、

コロネの全てが好きになった事で、丸くなったお腹まで愛おしい…。
いつか将来本当に子どもを授かったら幸せだろうなと思いつつ…

「コロネ…ラマーズ法だ！ひっひっふーだ！」

「ヒッヒッフー…産むときの練習ですものね…」

「頑張りますの♡」

「あなた様♥
違いますの♥
らめですの♥」

あ、ちゅ、
あ、ちゅ、

「赤ちゃんが出てくるんだから、
これは赤ちゃんの代わりだよ？
赤ちゃんは指程度じゃないぞ？」

「ホラー・ヒツヒツフーだよ！しっかりしろよ？ん？」

指で膣を思い切り切りかき回しながら俺はドSを発揮する。

「ロネもイヤイヤ言いながら感じ始めてるし」

「せっかくだし楽しみながら出産シムトレートしなさいな…」

「ヒツヒツフー…あなた様♥少し慣れましたので」

「もう少し太いのを試しません事？ヒツヒツフー♥」



「あなた様♥当然赤ちゃんは素肌♥
ゴムなんて
かぶりませんわよね？」

「早くそのまま入れてくださいまし♥
ヒッヒッフィー♥ヒッヒッフィー♥」

「コロネのペースになったらダメだ…ゴムはつけないと…
でも出産のシミュレートなら確かにゴムはないほうがいいよな？
…と俺もあっさり欲望に負けて生で挿入することにした。」

「もうあなた様って人はエッチなんですから♥」

「もう目的はいつでもよかった…」

「コロネとセックスがしたい！」

「そのためにコロネに覆いかぶさった…」



んんん♡ ああん♡

すずい
びすの♡

「生あ♡

「これですの♡

「これじゃないと

愛を感じませんの♡」

「コロネは2回目の生セックスの快感に
恍惚の表情を浮かべる。」

アッポ...

アッポ...

ゴムを嫌いなくせに避妊は男の責任と
うるさいのだが...コロネは多分だが
妊娠の仕組みをよくわかっていないのだ...

シッポ

シッポ



あんの♡あんの♡

普通にセックスをした。ヒッヒッフーとか忘れて、コロネとの生セックスが気持ち良すぎて夢中で腰を振り続ける。

ヒッヒッフー...

ヒッヒッフー...



愛し合う二人が一緒に居れば子供ができるってコロネが言ってた意味を理解しつつ奥まで性器を挿し込んだ...

パンパン

イキまわさ♡

めん♡

めん♡

素直に

射精した…

こっぴう時は

普段の3倍の精液

30倍の気持ちよさと

言うがそれに逆らうのは不可能…

だから冷静なうちにゴムをするのだ…

びゅん…

びゅん…

びゅん…

しかしもう遅いし、どっせ出すなら
一発も二発も同じなので、
このまま抜かずにもう一発と考え始めた…

びゅん…

びゅん…



「あなた様？あなた様？」

「ん？どうした？「コロネ」

一緒にセックスを楽しんでいたコロネが
急に不安げに話すものだから、

こちらにも冷静になった…。

「赤ちゃんがびっくりしたみたいで、
すぐ動きますの…。」

俺は、最初の避妊の失敗で避けていたが、
初めて妊娠の仕組みをコロネに説明をした。

10カ月前には、精液を膣に出さないと

大きなお腹にならないとコロネにしっかりと伝えた。

「あなた様…精液って…大事なもののなに

よく「ゴミ箱に捨てていたじゃありませんか？」

…オナニーした後、「ゴミ箱に捨てるわな…。」

「あなた様がコロネと名を呼びながら

した後、わたくしも触ると思いませんか？」



お

「あなた様♡産まれますの!」

生物としての基本を何度も超越してきたコロナなので驚かない。
つまり勝手に俺の精子で遊んで妊娠していたわけだ!

「落ち着けコロナ! 救急車呼んだ! 呼吸を整えろ!」

「こっつう時だけ無駄に落ち着いているのが俺の役目なので、
冷静な振りをして接する。」

「あなた様♡隣に居てくださいまし!」

「ずっと♡ずっと♡ずっと♡」



出ちゃいますの♡

後先考えない性格で

こんなだからコロナに怒られるんだらうけど…

「ずっと側に居るし永遠に一緒にだから…」

「コロナ様…結婚してください。」

「もう！あなただって人は今頃いい加減なんですから！

当たり前じゃありません事？来々々々世まで一緒ですよ！」

病院に着いた頃には赤ちゃんはほとんど外に出ていた…。

母子ともに健康で怪獣コロナさんは、いつものドヤ顔で

何事もなく俺に説教していた…。



「こんな遅くにおかえりなさいませ！あなた様！

後輩女子がアルバイト先に来ると浮かれて

おられたの存じ上げないでもお慰めですの？」

「ロネは俺の家に同居を始めた。子供については、

うちの親はもう一人欲しいと年甲斐もなく

子作りに励んでいたらしく、ロネも入れて

子供が2人増えると大喜び、でも家計の足し」と

俺がアルバイトを始めると「ロネは

30分遅く帰っただけで」の感じなのだ…。

「今日はただいまのキヌも

ありませんし怪しいですよー」

「ロネが初手から

怒ってるんだろ？」



「二人とも学校も通えてるし成績は落ちてはいない。親の育児支援もあるし、ロネに毎日スパルタされているのだから…」

「それでは、改めて新婚夫婦の定番を参りますの♡
おかえりなさいませあなた様♡

「エッチなさいいますの？セックスが先ですか？
それとも…わ・た・く・し？」

全部同じじゃねえか…といつツンツンの前以前

「いつもわたくしですのね？」といつツンツンがあったから
ツンツンはできない、ちよつと今日は二人たしヤル！

「ゴムならありませんわよ？
クラスメイトに配りましたし、
夫婦なので

不要と思いますの♡」

子供は
まだ
増えそつた…



「あなた様の分も

ミルク残してありますからね♡」

色々あったけど、俺たちは最高に幸せな夫婦だ！